

(1) 幼少期の学習が決め手

珠算や囲碁でも証明済み

日本珠算連盟主催の、数年前の段位検定試験で、六歳の幼稚園児が除暗算(暗算でする割り算のこと)で、最高位の“十段位”をかち取って、話題になったことがありました。

十段位とは、「六桁数(十万位まである数)を、二～四桁数で割る」という割り算を60題、三分間以内で解き、そのうち56問以上を正解した者が初めて獲得できる、という大変な段位です。

例えば $690,237 \div 813$ というような割り算を、回答欄に答を書き入れる時間を含め、一問あたりわずかに三秒間で解いていく、というのですから、私どもにはとても信じがたいことです。正に“神わざ”としか言いようがありません。私など、その十倍の時間を与えられても、60問中どれだけ正答できることでしょうか。

さて、最近、このような天才的幼児が、いろいろの方面で驚嘆すべき能力を発揮している実例がよく紹介されるようになりました。それらはいずれも、「天才」とか「神童」とかという言葉で表現されていますが、そこで披露される才能は、決して「天性による才能」ではありません。いずれも「幼少期における学習の成果」である、と断定できるものばかりです。

“幼児の能力開発”で世界的に有名なグレン・ドーマン博士は、「エ

スキモ一人は寒さに強いが、それは決して生れつきではない。乳幼児期から寒さに慣らされた当然の結果に過ぎない。また、アメリカインディアンや蒙古人が騎馬に巧みなのも、やはり生れつきではなくて、幼少期から騎馬の習慣があるためである」ということを現地で、原住民と生活を共にする中でこれを確認しています。

かつては、成人してから始めるのが普通であった囲碁の世界でも児童期からこれを始めることによって棋界に君臨した木谷実、呉清源氏らの活躍により、「児童期から始めないと一流にはなれない」というように、考え方が変わりました。それが今では、棋界の長老である高川名誉本因坊の言によりますと、「三歳の幼児は十分に囲碁が理解できるばかりではなく、三歳から囲碁を始めた者の才能は、それ以後から始めた者の才能に比べて、異質とも言えるほどの差異がある」と言われるほどに、幼児期の学習効果の高いことが評価されるようになりました。

冒頭に紹介しました“神わざ”とも言うべき珠算能力も、幼少期に学習を始め、しかも幼少期のうちにあそこまで到達できるだけの練習をしたから達成したのであって、幼少期を過ぎてから学習をしたのでは、とてもああはいかなかつたろうと思われます。

このように考えてきますと、子どもは“だれでも神童”なのだ、と言わざるを得なくなります。ドーマン博士は、「どんなに偉大な学者でも、幼児に比べたら、どうしようもない無能力者である」とまで言っています。